

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 1 日現在

機関番号：10102
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：24720110
研究課題名(和文) 1930～40年代日本アナキズム文芸の研究 文献データベースの構築とその応用
研究課題名(英文) Research into 1930s-1940s Japanese Anarchist Literature: The Structure and Applications of a Bibliographical Database
研究代表者
村田 裕和 (Murata, Hirokazu)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：10449530
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：戦前期のプロレタリア文学運動の中で、これまで十分に研究されてこなかったアナキズムの文学について研究をおこなった。基本的な文献情報を整理し、データベースを作成した。また、それらを活用しつつ、アナキズムの詩人について作品研究をおこなった。具体的には、萩原恭次郎、岡本潤、伊藤和の詩を分析した。また、これまで詳細が知られていなかった雑誌『エクリバン』の目録を公開した。他に有島武郎とアナキズムとの関係についても考察した。

研究成果の概要(英文)：My research focused on the literature of anarchism within the prewar proletarian literature movement, which has been insufficiently studied heretofore. I organized the basic bibliographic information and created a database, which I then put to use in studying the work of anarchist poets. Specifically, I analyzed the poetry of Hagiwara Kyojiro, Okamoto Jun, and Ito Yawara. As well, I publicized the annals of the magazine "Ecrivain," clarifying the details thereof for the first time. I also considered the connections of Arishima Takeo with anarchism.

研究分野：日本近代文学

キーワード：アナキズム文学 萩原恭次郎 岡本潤 伊藤和 有島武郎 エクリバン

1. 研究開始当初の背景

明治から大正期の日本において、文芸思想としても実践運動の上でもきわめて重要な位置を占めていた「アナキズム」は、1923年の大杉栄の死を境に衰退の道をたどった。戦時下の抑圧を経て、敗戦後には復活の兆しを見せたが、1950年代には思想としても運動としてもその影響力をほぼ完全に失ってしまう。そればかりか、秋山清や寺島珠雄らを除いて、歴史的検証もほとんどなされてこなかったといつて過言ではない。「アナキズム文学」についての研究を推進するために、まずその基礎となる初出雑誌の文献情報を蓄積するところから開始する必要がある。

2. 研究の目的

本研究課題では、日本のアナキズム文学について、基礎文献目録を作成した上で、その情報を活用しつつ、アナキズム文学の役割と歴史的意義について考察する。これらの基礎文献をふまえ、アナキズム詩人が時代(時局)と密接に関わった1930~40年代を中心にして、「抵抗」と「協力」の間で葛藤したアナキズム詩人たちの営みの意味を問い直す。

3. 研究の方法

小規模出版であった上に厳しく弾圧され、その後も埋もれたままになっているアナキズム文献の目録化については、既存の文献目録等も活用しつつ、(a)1930~40年代アナキズム詩誌・文芸誌・思想誌、(b)GHQ/SCAPによるアナキズム系の新聞・雑誌・図書・パンフレットに対する検閲、の2方面から情報収集を行う。

4. 研究成果

戦前期のプロレタリア文学運動の中で、これまで十分に研究されてこなかったアナキズムの文学について、基本的な文献情報を整理し、データベースを作成した。また、それらを活用しつつ、アナキズムの詩人について作品研究をおこなった。具体的には、萩原恭次郎、岡本潤、伊藤和の詩を分析した。また、これまで詳細が知られていなかった雑誌『エクリバン』の目録を公開した。他に有島武郎とアナキズムとの関係についても考察した。当初予定では4年間の計画で進めていたが、同時並行的に進めていたプロレタリア文化運動に関するより規模の大きい文献資料の共同研究が進展したため、研究計画最終年度前年度の応募をおこない基盤研究(C)へと発展的に接続した。アナキズム文献に特化した文献情報の公開など、引き続き現在のプロジェクト研究の中でも継続的に取り組んでいく。

(1) 萩原恭次郎

萩原恭次郎(1899~1938)は、アナキズム詩人としてもっとも著名であるが、実際の詩の分析はこれまでも多くはなされていない。第1詩集『死刑宣告』(1925年)は、未来

派的・ダダイズム的な形式によって歌われているが、第2詩集『断片』(1931年)では形式面での前衛性は失われている。この前後の時期の農村を題材とした詩に注目し、ロシアの詩人エセーニンとの比較を行った。エセーニンは共産主義が支配的となっていく社会の中で、農民・農村という立場からその矛盾に向き合い続けた。萩原恭次郎もまた、退潮のアナキズム運動の流れに位置しつつ、農村に帰り、共産主義とは異なる社会改良の道を模索していたが、しだいに孤立を深めることとなる。これまでのところ、当該時期の萩原恭次郎の変容を分析する手段は少なく、エセーニンとの比較は一つの有効な手法ではないかと思われる。(口頭発表)

(2) 岡本潤

岡本潤(1901~1978)は、萩原恭次郎と共に活躍したアナキズム詩人である。彼の第1詩集『夜から朝へ』(1928年)は、『死刑宣告』とよく似た前衛詩集である。この2つの詩集には「笑い」がよく出現する。ただし両詩集の笑いは一般的な表情としての笑いではなく、グロテスクな笑いであった。この笑いの表象についてバフチンや花田清輝らを参照しながら「フラン・ヴィタル」の視点から読み解いた。(口頭発表)

また岡本潤の戦中・戦後の詩人としての活動についての分析を戦後すぐの詩集『襤褸の旗』を中心としておこなった。1930年代、厳しい弾圧が続き、盟友萩原恭次郎が戦争協力詩と思しき詩を発表した直後に亡くなるなど、アナキズム詩人としての基盤がゆらぐ中、岡本の詩は「橋」を多く題材とするようになる。橋に人間文化への希望を託したのである。1940年の詩の変化をたどることで、詩人の言葉を喪失させるような過酷な時代の様相が明らかとなった。(論文)

(3) 伊藤和

伊藤和(1904~1965)は、千葉県農民詩人である。萩原恭次郎や岡本潤らと交流はあったが、思想家・評論家としての活動はほとんどおこなっていない。農民としての労働を基礎として、アナキズム思想をみずからの拠り所として生きた詩人である。彼の詩は、アナキズム詩人・理論家の秋山清からも高く評価されている。しかし、伊藤については文献調査がほとんどなされておらず、一冊の詩集が流布しているのみである。本研究では、初期から中期(1920年代~30年代)の詩について、これまで知られていなかった作品にあたりつつ、アナキズム詩人に至る道のりを分析した。過酷な労働の中で、虐げられることにならされた「父」たちの世代に反撥し、詩的表現のうえで、「一揆」を訴えるまでの変化の過程を跡づけた。(論文)

戦時中の伊藤は詩の執筆を断ち、農業に専念した。戦後、アナキズム詩人たちが活動を再開すると、秋山清・小野十三郎らの『コスモス』などに詩を発表するようになる。『コスモス』第7号に掲載されるはずだった詩

「B29 の大音」は、GHQ の検閲によって不掲載となった。米国メリーランド大学図書館に所蔵されている検閲資料を閲覧、分析した結果、数次にわたって検閲を行い、検閲官が伊藤の詩と格闘している様が報告書の記録からうかがえる。最終的に不掲載となったのはGHQ の指示によるものではなく、編集部の側の判断であるように思われるが、確定的ではない。日本の文学作品についての検閲研究は近年進展しているところであるが、マイクロフィルムでは検閲文書の判読が困難であり実地調査の重要性は今も高いと思われる。(論文)

(4) 有島武郎

有島武郎(1878~1923)は大正期を代表する白樺派の作家であるが、彼の思想にはアナキストであるクロポトキンの「相互扶助」の考え方が強く影響している。実際に北海道の農場を共産農園として解放する一方、知識人による労働運動の指導を否定し、労働者みずからの運動を称揚するなど、労働問題への関心は高かった。しかし、単純にアナキズム思想に基づいて共同体の構築を主張したわけではない。アナキズムに本格的に接近するのは晩年であるが、それ以前のさまざまな評論において有島が繰り返し説いていたのは、他者を救助することと、他者が自分を救助することが双務的ではないような関係性であった。つまり、助けることによって自分が助けられるといった閉じた関係性ではない共同体である。それを相互扶助的な社会として成り立たせるためには、従来の「相互扶助」を人間の本能と捉えるような考え方では不可能である。有島の相互扶助論は、実はもっとも鋭い相互扶助批判でもあった。(論文)

(5) アナキズム文学の雑誌

アナキズム系の文芸雑誌は数多く刊行されていた。その内の多くのものが、ガリ版(孔版印刷)を用いた手作りの雑誌であった。既存の目録などを参照し、約100タイトルの雑誌の目録を収集した。また、それらから漏れている雑誌や現在参観できない雑誌も多いが、可能な限り未発掘資料を探索し、現物を閲覧して目録を作成していくことが必要である。まだ十分な数ではないが、今後も継続していく。これまで未報告であった雑誌『エクリバン』の目録をインターネットで公開した(http://senryokaitakuki.com/fenceless001/fenceless001_15ekuriban.pdf)

アナキズム詩雑誌のうち、萩原恭次郎が前橋で発行した『クロポトキンを中心にした芸術の研究』(1932年)についてその特徴や歴史的意義を考察した。ここには相互扶助的な発想にもとづく詩や評論が発表されている。また、雑誌発行者の相互交流のあり方も、脱中心的な関係を構築しており、マルクス主義に基づくプロレタリア文学運動とは異なる運動のあり方にはさらに注目し、考察すべきであると考えられる。(論文)

また、秋山清・小野十三郎の詩雑誌『弾道』

との論争で知られる『北緯五十度』についても研究を行った。『北緯五十度』は北海道で発行されており、数名の東北出身の農民詩人も加わっている。彼らは多くを語らなかつたため、戦後、秋山清によって一方的に非難されるかたちとなっている。『北緯五十度』についてはさらに調査を加える必要がある。(口頭発表)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

村田裕和, アナキズム詩の地方ネットワーク —『クロポトキンを中心にした芸術の研究』における 相互扶助 —, 語学文学(第53号), pp.11-20, 2014年, 査読無し

村田裕和, 残余としての「相互扶助」 — 蟻塚ユートピアの向こうへ —, 有島武郎研究(第16号), pp.14-28, 2013年, 査読あり

村田裕和, 北総の詩人伊藤和はいかにして一揆の鐘を響かせたか, 立命館文学(第630号), pp.269-277, 2013年, 査読無し

村田裕和, 詩誌『コスモス』検閲の研究 — 伊藤和「B29の大音」削除から不掲載へ — (下), 立命館文学(第628号), pp.1-11, 2012年, 査読無し

村田裕和, 詩誌『コスモス』検閲の研究 — 伊藤和「B29の大音」削除から不掲載へ — (上), 立命館文学(第627号), pp.1-10, 2012年, 査読無し

村田裕和, 岡本潤の戦中・戦後—『襤褸の旗』の頃—, 論究日本文学(第96号), pp.80-94, 2012年, 査読無し

[学会発表](計 3 件)

村田裕和, 虚無的な「笑い」: 愛と憎しみの双面神, 第4回比較文学研究会, 2015年3月28日, 東北大学, 宮城県仙台市

村田裕和, アナキズム詩の地方ネットワーク —『北緯五十度詩集』『大阪』を視座として—, 平成25年度語学文学学会学術研究会, 2013年7月25日, 北海道教育大学釧路校, 北海道釧路市

村田裕和, 萩原恭次郎とセルゲイ・エセーニン—農村アナキズム詩のなかの生活と精神—, 2013年度日本比較文学学会北海道大会, 2013年7月6日, 北海道大学, 北海道札幌市

[図書](計 1 件)

「大杉栄と仲間たち」編集委員会編, 『大杉栄と仲間たち』『近代思想』創刊100年』, ぼる出版, 2013年, 分担執筆, 村田裕和, 『近代思想』のドラマ批評—「新しい女」をめぐる—, pp.181-197

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

<http://researchmap.jp/muratahirokazu/>

<http://senryokaitakuki.com>

6．研究組織

(1)研究代表者

村田 裕和（Murata Hirokazu）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：10449530